

アントネッロ・ダ・メッシーナ作《受胎告知の MARIA》の図像源泉をめぐって  
——クレタ・イコンとの関連を中心に——

衣笠弥生（京都大学）

15 世紀シチリアの画家アントネッロ・ダ・メッシーナ作《受胎告知の MARIA》は、きわめて特異な作品である。同時代に「受胎告知」を主題として制作された作品では、MARIA は大天使ガブリエルと相対するように配置され、側面から全身像が描かれるのが一般的であった。ところがアントネッロの作品では、クローズアップされた MARIA の上半身が画面全体を占め、書見台と本を除いて、ガブリエルはもちろん、白百合や聖霊の鳩など「受胎告知」の場面にまつわる主要なアトリビュートを確認することはできない。同主題を描いた従来の作品にみられる要素が排除されているのである。

このような特異な表現のため、先行研究では、祈念を目的としたイコン画との関連、構図や MARIA の親しみやすい容貌、鑑賞者に向けられたまなざしの表現などアントネッロ自身が描いた人物像との類似から肖像画であった可能性を含め、「受胎告知の MARIA」という主題自体に疑問を投げかける議論が展開されてきたが、決定的な結論は出ていない。そのなかで近年、ロレンツォ・ペリーコロの研究（2009 年）は、クローズアップされ、ほぼ正面を向く MARIA の表現について、フランドル画家が描いた「受胎告知」の場面の MARIA の上半身が図像的に類似していることを示し、本作品の主題と図像の源泉について考えるにあたって説得力のある方法論を提案した。本発表は、これら近年の研究動向やペリーコロの方法論を踏まえて、東方で描かれた「受胎告知」とりわけクレタ・イコンとの関係にも注目し、本作品における図像的な源泉に新たな視点を提供するものである。

15 世紀クレタのイコンに注目するのは、同地で制作された作品に従来の東方イコンにはない新しい様式や図像が見られ、これらが西方カトリック世界で大量に流通していたという背景があるからである。15 世紀初頭よりコンスタンチノーブル出身の画家たちが移住し活動をしていたクレタ島の工房では、聖母子像を中心とするイコンがヴェネツィアへの輸出品として大量に制作されていた。15 世紀後半、ヴェネツィアとクレタ間のイコン交易がピークに達する頃、アントネッロはヴェネツィアに滞在したことが知られている。同地で一般市民層にまで普及していたクレタ・イコンをアントネッロが目にした可能性も考えられるだろう。したがって本発表では、同時代トスカーナの絵画技法を採り入れ、正統な東方画家の手になる作品であることを示すために署名を施し、正教会のイコノスタシスにしばしば描かれた聖人のクローズアップを独立した一つの作品にするなど、様式や図像における市場の要求にクレタの画家がいかにか柔軟に対応していたかを具体的な作品から検証し、これらの作品から《受胎告知の MARIA》の図像源泉を探ることによって、アントネッロの作品に見られる独自性を明らかにしたいと考える。